

倉橋健一の
詩集をよむ

劉曉波の夫人 孤独に耐える厳しさ

今回は慣例を破った翻訳詩を紹介したい。作者の劉霞は、中国で一九八九年の天安門事件以来民主化を訴え続け、「国家政権転覆扇動罪」という罪に問われ、獄中でノーベル平和賞を受賞、そのまま昨年七月入院先で亡くなった劉曉波の夫人。とあって、獄中結婚で、ふつう私たちが経験する家庭生活を送ることはなかった。

だが早くからジョイスの「意識の流れ」などヨーロッパの現代文芸思潮を吸収した詩人で、劉曉波とも詩を介して出会い、愛し合ってきたといわれる。訳者の劉燕子は「笑みをたたえた繊細な顔立ちだが坊主頭で、よく長いショールをまとっている」と印象を語っている。

面をこよなく愛する感性豊かな婦人であることは私たちも知っておいていいだろう。

紹介した一篇はつい先日刊行されたばかりの詩集『毒薬』から。別に注釈はいるまい。孤独に耐えるもののきびしさが行間にみなぎっている。

訳者のひとり劉燕子は、生前の劉曉波とも劉霞とも面識のある佳麗な現代中国文学者。今ひとりの訳者田島安江には、劉曉波詩集の訳業もあり、今回のこの詩集の版元から、劉曉波の『独り大海原に向かって』と同時刊行になっている。